

「鉛筆の持ち方」から見えてくるもの

京都女子大学教授 吉永 幸司よしなが こうし

「書くことが嫌い」と言っ子の言い分

鉛筆の持ち方を話題にするとき、四年生を担任したころのことを思い出す。そのクラスのとくに俊夫君（仮名）がいた。彼は、国語の授業、特に書く活動を嫌った。

「文を写してまじょう。」

「作文を書きまじょう。」

と指示をするたびに嫌そうな顔をするのである。このような反応を迷惑に思い、わがままな子だと思ひ込んでいた。

ところが、彼がノートに文を写している様子を見て慌てた。鉛筆を思い切り握り、手を机に固定して書いているのである。正しい鉛筆の持ち方とはほど遠く、腕は動かさず手首だけを曲げているという書き方であった。当然、鉛筆は滑らかに動いていなかった。彼は、数文字書いては手首を振り、数文字書いてはため息をついているのである。その様子は見ていて痛々しかった。

むしろ、その後の授業で、機会を見て繰り返し指導することのできるという性質のものである。

当然、鉛筆の持ち方は一年の後半、二年、三年と繰り返し指導をしていくものとしてとらえたほうがわかりやすい。四年を担任したときも、当然どの子も正しい持ち方をしていると思ひ込み、俊夫君のような子がいるということは考えてもいなかった。すでに一年で指導をしているからという勝手な理由をつけて納得していた。

また、「あなたのクラスで、正しく鉛筆を持てている子は何人でそうでない子は何人？」と問われ、それに答えられなかったという経験もあったが、それほど重要なこととも思っていないかった。「鉛筆の持ち方くらい……。」という意識があった。

三 鉛筆の持ち方から見えてくるもの
鉛筆の持ち方は大丈夫か？というところが気になりだしてから、それに注目をして机間巡視（机間指導）をするこ
とが多くなり、その過程で新たに気づくことがあった。

最初のうちは鉛筆の持ち方だけを気にして指導をしていた。しかし、しば

結果だけを見れば、他の子との違いが見えにくく、見逃しそうな彼のノートであったが、そこへたどるまでにたいへんな苦痛が伴っていたのである。彼は、その苦痛を「書くことが嫌い。」という言葉で訴え続けていた。しかし、かなりの期間そのことに気づかなかったことを今も悔いている。

二 鉛筆の持ち方の指導は入門期だが

鉛筆の持ち方の指導は一年生の早い時期から始める。教科書では、正しい持ち方の写真を示している。鉛筆の持ち方だけではない。入門期の指導として、一年生の上巻では「あ・い・う・え・お」の口の開け方や椅子の座り方、平仮名の正しい書き方を示している。

入門期の教科書は基礎的な内容がちりばめられている。しかし、時間の制約もあって、これらの内容が定着するまで徹底して指導をするということはない。

らく続けていくうちに机の上にある筆箱の置き方、それに筆箱の中の鉛筆の芯の尖り方まで目に入るようになった。「新しい鉛筆になった」「筆箱を大事に使っている。」など、周辺まで見えるようになった。

文章を書いているときでも、滑らかに書いている子、消しゴムを使い何度も消しては書き、書いては消している子、一つの文から次の文を書くまでに時間をかけている子など、学びの実態を適切に理解できるようにもなった。

鉛筆の持ち方に注目をするという小さなきっかけが、子どもたちの生活や学習ぶりを見ることにまで広がっているのである。

……………

国語の授業は、子どもの理解から始まるという考えをもっている。発言したくても、自信をもって言えないために発言を控える子。よい考えをもっていない子。周りのことが気になり、考えを変えてしまっ子など、脆くて崩れやすい心を支えるいちばんの味方は教師である。味方になるためには、子どもたちの心音や呼吸の聞こえる距離で見守ること、これも子どもも理解の大事な方法と想っている。

「書くことが嫌い。」に導かれた「鉛筆の持ち方」の発見は私の大事にしている指導技術の一つである。

